

## 表彰について（選考の経緯）

表彰申し上げる順に概要をご報告いたします。

### ■歴代サポーター講座開催回数上位キャラバン・メイト

事業開始当初より「認知症サポーターキャラバン」を縁の下で支えてきてくださったのは、認知症サポーター養成講座の講師であり、同時に受講者にとって最も身近な相談先でもあるキャラバン・メイトの方々です。20 周年の節目にあたり歴代のキャラバン・メイトの中で講座開催回数の上位の方 22 名に感謝状をお贈りいたします。

### ■キッズサポーターによる認知症への理解をテーマとする作品

キッズサポーター（認知症サポーター養成講座を受講した小学生、中学生、高校生）による作品の表彰は、今回が 9 回目となります。

今年度は、文芸作品（作文、詩、俳句、標語等）が 41 作品（小学生 1、中学生 3、高校生 37）、自由作品のうち「研究報告、活動報告」が 15 作品（小学生 2、中学生 1、高校生 10）、「ポスターや絵」が 2 作品（小学生 2）の応募がありました（学校数は、小学校 5 校、中学校 4 校、高校 8 校）。

その中から最優秀賞 3 作品、優秀賞 3 作品及び熱心に授業にて認知症サポーター養成講座に取り組み、指導をされた学校 2 校を表彰する運びとなりました。

キッズサポーターのどの応募作品からも一生懸命に考えを表現しようとする純粋な気持ちが伝わり、選考委員も甲乙をつけるのに苦心いたします。

作品から見えてくるのは、子どもたちは学習して知識を吸収すると、すぐに発展して「では自分に何ができるのだろう」考えていく、柔軟さを備えているということです。それはさらに、地域や社会においてできることに思いをはせたり、認知症のある方への接し方を学んだことをきっかけに誰にでもこのように対応すればよいのだと考えたりすることにつながっています。

実際に自分の地域の認知症の方の生活の様子やサービスなどを綿密に取材

してまとめ上げた研究報告、認知症カフェを企画・運営している活動報告など見事な取り組みがあり、いずれも最寄りの地域包括支援センターなどともよい連携が図られており、それぞれの地域でキッズサポーターが頼もしい存在となっていることが伺えます。

ここまでの成果に至るには、サポーター講座で講師をされたキャラバン・メイト、地域の関係諸機関の方、日ごろからきめ細かな指導をしていらっしゃる教員の方たちのご尽力があつてのことと感謝申し上げます。

現在、小中高校生の認知症サポーターは累計で約 470 万人を数えますが、最近では企業や職域団体の職員で小学生の時にサポーター講座を受けた、という方が増えてきており、20 年の継続を踏まえ、早期の教育の重要性を改めて感慨深く受けとめております。

## ■認知症サポーターの優良活動事例

今年度はサポーターキャラバン事務局を担う全自治体事務局、企業・職域団体事務局（合計約 2000）へ「認知症サポーターの活動事例」、「企業・職域団体のチームオレンジ取り組み事例」「チームオレンジ取り組み事例」の優良事例を募集し、28 件の応募がありました。

その中から選考委員会による選考の上、「認知症サポーターの活動事例」（3 自治体）、「企業・職域団体のチームオレンジ取り組み事例」（1 企業）「チームオレンジ取り組み事例」（2 団体）を表彰する運びとなりました。

こちらでも看護学生サポーターによる地域の認知症カフェでの活動、中学生が自分たちが受講するサポーター講座に企画から関り地域包括支援センターとも連携体制をつくっている例など若い人たちの活躍を起点に地域連携が進められている事例が目を見せます。

もちろんシニアの方たちも負けてはいません。高齢男性グループによる地域で孤立しがちな高齢者を「食」を通して手助けする活動も嬉しい限り

ですし、ファミリーレストランが店舗を提供して行われている本人ミーティングでも地域のサポーターがボランティアで参加しています。また2つのチームオレンジもさまざまな機関と協力関係を構築し、メンバー全員に活躍の場がある素晴らしい取り組みです。

多様な立場の方、多世代の方が地域の課題解決を目指して取り組む、それには活動する人個人の得意なことを生かす、あるいはグループや企業の特性を生かすことが必要となります。そのうえで本日表彰する事例からは、関わる方が楽しく活動できる工夫をしている特徴が見て取れます。

このような地道な活動の積み重ねの先に、おそらく振り返ってみるとそこに地域共生社会が形をなしているのかもしれません。

ぜひ本日お集りの皆様には、ご自分のところでも取り入れられそうなことは、その過程や手法にも注目してそれぞれの地域や企業の特性に応じて生かしていただければ幸いです。